

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	鈴木 瑛貴 【比較社会文化学専攻 平成27年度生】	要 旨
論文題目	身体表現活動における保育者と子どもの対話的なかかわり合いの様相	<p>本論文の目的は、身体表現活動における子どもと保育者の対話的なかかわり合いの様相を明らかにすることにある。「対話的なかかわり合い」に関して、第1章では、D.N. スターンと鯨岡峻の理論に基づいて保育者と子どもの対話的なかかわり合いの様相を考察した。それは、保育者はイメージをもって言葉かけをし、子どもはその言葉の背後にある生气情動を受け取り、その生气情動を内包する動きを表現するというなかかわり合いがあり、このような共有体験は子どもの表象に書き込まれ、暗黙の領域に積み重ねながら、保育者と子どもの情動領域の共有が深まったり、戻ったりと変容していくというものである。こうした理論的前提をふまえて、第2章では、身体表現活動を実践する保育者3名にPAC分析を用いたインタビュー調査を行った。そこで挙げられた要素から、保育者と子どものなかかわり合いの様相を再構築すると、なかかわり合いの3つの形態が見出せた。第3章では、3名の保育者の身体表現活動実践を参与観察し、その記録から、保育者の言葉かけと動き、それに対する子どもの反応を書き出し、分析した。第4章では、継続的な身体表現活動の参与観察を通して、子どもの表現の変容プロセスを捉えた。結章では、各章の結果を基に、身体表現活動における保育者と子どもの対話的なかかわり合いの様相を考察した。</p> <p>保育者と子どものなかかわり合いには、保育者と子どもが共に表現世界を生み出していくようななかかわり合いの形と保育者が子どもの成長を願って指導するようななかかわり方があった。保育者と子どもが共に表現世界を生み出していくようななかかわり合いの形は、その瞬間ごとになかかわり合いの形を変容させながら対話的に保育者と子どもが活動を展開させていると考えられた。保育者が子どもの成長を願って指導するようななかかわり合いにおいては、保育者から子どもへの一方的な働きかけにもなりうるが、子どもの反応を受けとめ、それに対して活動をデザインしていくことで、その中にも対話的なかかわり合いが生じると結論づけている。</p>
審査委員	(主査) 教授 猪崎 弥生	
	教授 水村 真由美	
	教授 浜口 順子	
	教授 新名 謙二	
	教授 米田 俊彦	